

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所より施設理念をホーム内に提示し常に目に入るようにしている。理念の実践に向けて職員は毎月の目標を立て利用者、家族の意向をくみ取り信頼関係の構築に努めている。	「奉仕」「感謝」「信頼」という法人の理念とそれに基づくホームの理念があり、利用者の「心豊かな暮らしを支え、地域の福祉に貢献しようとしている。職員は月1回の法人全体会議で理念を唱和・確認し、また、ホーム全体ミーティングで毎月の支援目標を決め理念の具現化に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣の社会福祉協議会のイベントのお知らせをいただき参加している。 毎年秋には施設周辺でのお祭りがあり参加、交流している。	ホームと看護小規模多機能型居宅介護事業所の入る複合施設は、母体ともいべき病院、他法人運営の特別養護老人ホーム・デイサービスなどのある一大福祉ゾーンの中にあり、お互い連携・協力関係にあり、それぞれ企画する祭りなどに利用者も参加している。その敷地は、二つの自治会に跨っており、ホームからもそれぞれに働きかけを行い良好な関係づくりをしようとしている。ホームには地域の人々による獅子舞が訪れ、利用者も馴染みとなった地域の文化の一端に触れている。また、利用者が力を合わせて制作した郷土力士を模した100号サイズのちぎり絵を町の文化展に出品したりしている。更に、敷地内には病院職員の7ヶ月～未就学児を預かる保育園があり、利用者も散歩時などに交流し、介護初任者研修の専門学校生、病院の実習の際に見学を訪れた看護学生などの若者たちともふれ合っている。	開設から初年度ということもありホームの存在が地域へなかなか浸透していないことと複合施設の2階がホームということもあり、地域の人々が気軽に立ち寄るまでには到っていない。限られた利用者になるかもしれないが、今後は、地域に出掛けることで人々と交流したり、社会福祉協議会等を介しボランティアを紹介していただき、ホームの行事等に関わっていただくなど、多くの人々とふれあう機会を創られていくことを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	開設年度であり、運営推進会議を通じて、自治会長や民生委員の方と意見交換を行った。 秋の地域の祭りに出掛け、地域の方との交流を図った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定期的に運営推進会議を開催し、事業所の活動報告や意見交換を行い、サービス向上に努力している。	利用者家族、二つの自治会の会長及び民生委員、町担当部署職員、地域包括支援センター職員、協力病院連携室担当者などが出席し、ホームとして2ヶ月に1回、偶数月に開催している。また、そのうち、2回に1回は併設の看護小規模多機能型居宅介護事業所と合同で、利用状況や活動報告、職員研修報告、事故報告などを行い、出席者からも身近な情報をいただいたり、ホームからも色々な認知症に関わる事例報告を行い、お互いに活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域ケア会議に出席して事例検討、情報収集を行っている。	開設初年度ということもあり、町の担当部署には運営上のことで問い合わせをしており、ほぼ、1年が経過する中で運営上の相談も少なくなりつつある。介護認定の更新の際には、利用者の自宅のある四つの市町村から調査員がホームを訪れ、基本的には家族も同席し、職員から現況報告を行っている。	

グループホームやまびこの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束を実施しないケアに努めているが、安全の為、玄関、エレベーターの鍵は施錠している。外出傾向の方には気分転換に外にお連れしている。	「身体的拘束等の禁止」についてはホームの運営規定及び重要事項説明書に明記されており、職員も正しく理解し、拘束のないケアに徹している。認知症介護職実践者研修等に参加した職員がホームの全体会議等で身体拘束Oに向けた内容について伝達研修を行い、意識づけを行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全体ミーティングで虐待についての勉強会を行っている。職員のストレスにその都度、把握するように努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修、勉強会の開催について計画をしている。現在成年後見人制度を利用中の利用者はいない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に契約内容、重要事項の説明を丁寧に対応している。ケアの取り組み方法や終末期の考えに不安があるときには常に対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	来所時に利用者の様子を伝え意見や要望は聞くように努めている。頂いた意見や要望はその都度話し合い反映するようにしている。	ほぼ3割ほどの利用者が自ら意見や思いを伝えることができ、職員は可能な限り応じている。家族の来訪については毎日訪れる方もおり、また、遠方の家族も少なくとも2ヶ月に1回は来訪しており、ケア内容についての具体的な要望を聞き入れ、可能なことから、即、実施するようにしている。利用者の誕生日会や行事外出についても家族に声を掛け、その活動のなかで利用者の現況を理解していただき、また、初期のアセスメントで拾うことが出来なかった新たな情報にふれることもある。ホームでは毎月、「やまびこ通信」を発行し家族に暮らしの様子を伝え、コミュニケーションの一つとして有効に使っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全体会議で意見や提案を聞く機会を作っている。人事考課制度があり個人面談で職員の提案を運営に生かしている。	ホームでは月1回、全体会議とユニット会議があり、随時のカンファレンスも行われ、職員の意見や提案が言いやすいように体制を整えている。また、介護に関する技術研修等も定期的実施されており、一人ひとりの職員の質のアップも図られている。人事考課制度に沿い、職員は自ら年間目標を立て、半期に一度、上長と面談し目指す方向を明らかにしている。法人として衛生委員会を立ち上げ、職員のストレスチェックを予定しており、職員のメンタル面での健康にも配慮しようとしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎年度、個々の職員との面談を実施しており、職員の業務への取り組みや維持件を聴取し、改善に努めている。		

グループホームやまびこの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の外部研修、資格取得に向けた支援もある。同敷地内の専門職の協力を得て介護技術研修を月1回は実施している。年間研修計画で外部研修に参加促進を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域ケア会議への参加や他施設の見学をしている。今後、法人が開催する職員研修会へ外部施設の方への参加頂ける様計画している。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人・家族よりアセスメントシートに記入していただき、同時にヒアリングを行う。入居時には再度ヒアリングを行いケアの提供を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前にアセスメントシートに家族に記入していただき、ヒアリングし、入居時に再度ヒアリングを行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前に本人・家族からヒアリングした要望に答え、現在のADLを把握し残存機能を生かした支援を心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者と職員は協力して家事(食事作り、後片付け、掃除、洗濯たたみ等)を行っているが、職員中心で行っている事が多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族が面会等に訪れた際には、支援に参加して頂いている。受診や外出、自宅へ帰宅際は協力を要請している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	なじみの店へ理髪や買物に職員同行で外出の支援を行っている。また家族、知人に面会に来ていただいたり、面会に出掛けられている。	親戚や友人、昔の同僚などを迎え入れる利用者がいる。利用者によっては毎月、あるいはお盆や年末年始に一時帰宅や泊りで帰省する方もおり、ホームでは今までの生活が続くように支援している。隣接の病院等と同じ敷地内の遊歩道で旧知の人と出会い話をする利用者もいる。併設の看護小規模多機能型居宅介護の利用者とイベントやホームデッキでのお茶会でふれあう機会もあり、新たな交流が生まれている。	

グループホームやまびこの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	家事やレク、また食事の席等で会話できる環境の提供しているが、利用者同士のかかり合いは少ない。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	本人・家族からの要望があれば、相談・支援に応じる。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	生活の中の日常会話等から、希望、意向を聞き出すよう心掛けている。困難な場合は家族からヒアリングを行う。また入居者の表情やしぐさから予想しアプローチを試みている。	ほぼ3割ほどの利用者が自ら思いや意向を表出することができ、他の利用者についても職員はアセスメントシートから把握した、好きなこと、できることなど、利用者の関心のある話題を投げかけ、その会話の中から思いや意向を聞き入れ選び易いように働きかけをしている。野球の好きな利用者が職員とキャッチボールをしたり、レース編みを趣味とする利用者には針と糸を用意するなど、利用者の生きがいに繋げられるようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前、入居時にアセスメントシートに記入して頂き、ヒアリングを行い把握に努めている。疑問点が生じた場合、本人・家族からヒアリングを再度行う。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	残存機能を生かした、食事提供・排泄介助を行っている。生活の中で入居者の機能を確認を行う。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	全体ミーティング・ユニットミーティング・カンファレンスで支援計画～支援の実施～支援の見直しを行っている。	各職員は基本的に2名の利用者の居室を主・サブという形で担当しており、衣服の入れ替え等、整理整頓をしている。また、日常的な心身の状況等にも関わりを持ち、ユニットのカンファレンスでも主として担当している利用者の現況を説明し、更に、ユニット全員で状態に変化の見られる利用者について検討し各ユニットの計画作成担当者が支援計画に反映している。支援計画の見直しは基本的に長期計画に合わせ6ヶ月ないしは12ヶ月で実施し、変化が見られた場合には、即、変更を掛けている。見直しの時期には利用者本人や家族からの要望も受け入れ、利用者本位の計画を立案している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護用ソフトを用い、個別に記録を行い職員間で情報共有している。またユニット内でノートを用い情報共有している。		

グループホームやまびこの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者それぞれの時間に沿ったケアの提供に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居時に今までの生活歴や趣味・嗜好を聞き取り、情報収集をしている。外出やレクレーションの参加に活かしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は本人、家族の希望で決めている。家族から依頼があるときは併設の施設協力医を紹介している。往診の依頼などかかりつけ医と連携を通じて支援している。	かかりつけ医については在宅時の医療機関の継続を基本としている。同じ敷地内の病院が協力医療機関となっており、その病院の医師による訪問診療が2週に1回あることから多くの利用者がこの機関を利用している。町内の他の医師の往診を受ける利用者もいる。併設の訪問看護ステーションとも契約しており、2週間に1回の来訪の他、24時間、緊急時等に連携が取れるようになっている。受診の前後の家族への連絡や報告については居室担当職員が行うことになっており、不在時には管理者から伝えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同建物内に併設されている訪問看護ステーションでは日常の健康管理、変化のあった場合は24時間体制で連絡をとり相談しやすく早期対応ができる体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には本人への支援に関しての情報を医療機関に情報提供している。入院状況の把握を行えるように、家族、医療機関と連絡を取っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に契約内容、重要事項の説明や説明に丁寧に丁寧に対応している。ケアの取り組み方法や終末期の考えに不安があるときには常に対応している。	本年度、結果的に、お一人の利用者の看取りを実施した。訪問診療の医師や訪問看護ステーションの看護師と連携しつつ終末期の支援をし、また、職員の中にも特別養護老人ホームでの勤務経験のある方もおりその際の混乱はなく、他の利用者にも影響は及ばなかったようである。	利用者の平均年齢も高く、いつ、重度化するかわからない状況ではないかと思われる。ホームとしての「重度化や終末期に向けての指針」等で方向性を明らかにし、本人や家族等に更に契約時に詳細に説明されることで安心して繋がれることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時や急変時の対応は訪問看護師より勉強会を通じ指導をもらっている。		

グループホームやまびこの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災訓練を年2回実施している。地域との協力体制は今後、話しあいを重ねて協力体制を強化していきたい。	複合施設として春・秋の年2回防災訓練を実施しており、隣接する病院の総合防災訓練にも職員が参加し、常に連携を取れるようにしている。また、病院が複合施設の緊急避難先となっており、更に、その病院が地域の避難所ともなっていることから非常時に備え食料品等も蓄えられている。地域への災害時等の協力依頼についても働きかけを行っている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーを損ねない対応を実施している。接遇面の研修や勉強会を重ねていきたい。	利用者への声掛けは苗字、名前へ「さん」づけで統一しており、中には本人や家族の了解を得て、「おじいさん」と敬意と親しみを込め呼びかける場合もある。職員は自分の意思や価値観を押し付けることなく、勝手に決めつけることもなく、あくまでも利用者本位を旨とし支援に当たっている。入浴や排せつの介助については利用者の意思を確認し、異性の職員の介助に違和感を感じることがあれば同性に交替している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者に合わせて選択できる場面をつくり思いや希望を聞くようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な1日の流れは職員では把握して利用者の活動できる事には体調や本人の希望を確認して支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	馴染みの化粧品や美容院を継続している。ホームでも月に2回、床屋に来てもらっている。更衣時は衣類の選択をしてもらい気に入ったものを着用してもらう。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	下準備、味付け、盛り付け、食器拭きなど出来ることを分担して行っている。行事や季節に合わせて松花堂弁当の提供をしている。おやつも一緒に手作りをして食べることもある。	現在、職員配置の関係で食材調達も含めた調理関係を暫定的に協力病院関連の給食会社に外部委託している。調理済みのものをホームで刻んだり、ペースト状にするなど利用者の咀嚼や嚥下の状況に合わせて対処している。一部介助の方もいるが、昼食時、職員が声掛けしながら介助する姿が見られた。おやつの時間にホットプレートを使い、ホットケーキやシラスンペイなどを作ることもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量を記録し足りない場合は、好みのものを利用し補充している。個々の状態に合わせて刻んだりミキサーにかけたりし、使いやすい食器を使用している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	それぞれに合ったケア用品を使い、必要な場合は道具を預かったり、見守りできやすい場所で介助したりしている。		

グループホームやまびこの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレ誘導しても便座に座れない場合は男性の場合立ったまま尿器を使用し排尿を促している。排泄パターンを把握しパッドやパンツの使い分けをしている。	自立している方は数名で、他の方は何らかの介助を必要としている。昼間布パンツで夜間はリハビリパンツを使用したり、安心のために昼・夜ポータブルトイレを利用する方もおり、利用者や家族と相談しながら一人ひとりに合わせた対応を行っている。また、利用者の状態に合わせ、支援方法の変更も掛けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便表を記録し状態を共有しやすいようにしている。入居前から利用している青汁やヨーグルトなどそれぞれに合ったものを使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しむように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	希望に合わない場合は時間を変えたり日にちを変えたりして支援している。一般浴とリフト浴を体調や状態に合わせて利用している。ゆず湯など季節の湯を楽しむこともある。	基本的に週2回入浴しており、一人ひとりの入浴の曜日が設定されている。ユニット間の中央部分に浴室があり、一般浴槽とリフト浴槽がある。現在、リフト浴槽を使用する利用者が増えている。今のところ対象の利用者はいないが、寝浴の必要性が生じた場合には併設1階の看護小規模多機能型居宅介護事業所での入浴が可能となっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	それぞれの生活リズムや体調、活動状況に合わせて午睡や就寝、補水等の支援を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	配薬、服薬ともに漏れや誤りが無い様、違う職員でチェックを行っている。服薬の変更時は申し送りや記録を通し職員全員が状況の確認が共有できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食事、洗濯など得意なことを役割として行ってもらっている。買い物や散歩に出かけ、気分転換を図っている。また、趣味の塗り絵やレース編みなどをして楽しめるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常的にホーム周辺の遊歩道を散歩している。季節を感じられるよう紅葉や花見の外出支援を行い、時には家族の参加もある。日用品や食品の買い物に病院の売店を利用することもある。	ホーム内で常時車いすを使用している方が数名おり、外出時には更に多くなり、花見、紅葉狩りなどにはユニット毎に車いすを積みマイクロバスで出掛けている。ホームの入る複合施設は、病院を中心とした町の福祉ゾーンの一角にあり、広大な敷地内には遊歩道もあり、車いすの利用者とそれを押すことのできる利用者及び職員が季節に合わせて出掛け自然とふれあっている。ホームのデッキで周囲の桜の木々などを眺めお茶を飲み気分転換することもある。今年度、複合施設南側の草地进行して活用していく計画があり、利用者の気分転換の機会も増えそうである。	職員体制が十分でないということもあり、日常的な外出が難しくなっている。今後、体制が整った際には、利用者家族や外出ボランティアなどの協力も得ながら、五感刺激の意味も含め、更に、外へ出る機会を持たれていくことを期待したい。

グループホームやまびこの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	原則として現金の所有はしていないが、希望のある場合は家族と相談し自己管理し使用できるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望がある場合は自由に電話できるようにしている。手紙の返送もできるよう、はがきの購入や一緒にあて名書きをするなどの支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ユニット間の廊下に節句の人形や季節の花を飾っている。天気の良い日にはデッキに出てお茶を飲んだり体操したりしている。トイレや居室がわかりやすいよう案内表示をしている。	リビングの天井は高く船底天井で、また、畳の可動式ブロックで小上がリスペースを設けており、和風を連想させるゆったりとしたスペースが確保されている。また、窓も広く自然光が入り、ペアガラスでもあるので、保温性、防音性への配慮もみられる。床や壁紙も濃い茶系の色調で落ち着いた雰囲気を醸し出している。また、床暖房とエアコンが整備されているので年間を通じて快適に過ごすことができる。キッチンも対面式で語り合いながら調理をすることができる。片方のつつじユニットには「つつじ文庫」と称し、週刊誌や雑誌を始めとした気軽に手に取ることができるものが置かれている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事以外の時間は、その時に合った利用人数や内容によってテーブルのレイアウトを工夫している。たたみやソファも配置し、移動しながら腰を下ろしたり独りで休んだりできるスペースも用意している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には使い慣れた馴染みの道具を持ってきてもらうようお伝えしている。好きな花や家族の写真を飾ったりしている。必要な方はテレビやラジオカセットデッキなども利用している。	洗面台・エアコンが備え付けられており、ベッドや整理ダンスもホームで用意され、動きやすいコンパクトな配置となっている。着替えや日常の洗面用具・身だしなみ用品、寝具等、必要なものが持ち込まれている。利用者が落ち着いた時点から、更に引き出し付き収納ボックスを置いたり、家族の写真やイラストなどを壁に貼るなど、家族の配慮もあり、徐々にその人らしい家庭的な居室づくりがされている。各居室の窓も広く、桜などの木々や遊歩道を歩く人々を眺めることもでき開放感がある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	腰を下ろしながら洗濯ものを干す場所や見守りながら調理をできる場所をつくり安全に活動できるようにしている。		